

人々に支えられ発展していく水田作経営 ～会社は従業員のために、従業員は会社のために～

大口町 服部起代子（はっとりきよこ）さん
水稲、大麦、露地野菜（キャベツ・ブロッコリー）、野菜苗

【平成24年3月21日掲載】

大口町は名古屋市の北側に位置し、木曾川が運んだ肥沃な沖積土壌の農地が広がる一方、都市化が進んでいる地域です。この地で大規模に水稲、大麦、露地野菜、野菜苗生産を行っている服部農園有限会社取締役の服部起代子さん（写真1）を紹介します。代表取締役であるご主人の靖宏氏とともに、昭和45年から農業経営を行ってきました。

平成7年に靖宏氏が病気で倒れてからは、起代子さんが経営の中心となり、若い従業員とともに服部農園を支えてきました。

現在の経営規模は、水稲40ha、麦茶用六条大麦20ha、キャベツ・ブロッコリー3ha、野菜苗生産10万本で、労力は、服部さん夫婦、養子縁組した娘さんの夫の忠さん、20～30歳代の社員4名で構成されています（写真2、3、4）。

また起代子さんは、愛知県農村生活アドバイザー協会に所属し、平成20年7月には、大口町農業委員に選出され、現在2期目に入り、地域農業の発展に貢献されています。



写真1 服部起代子さん（左）
靖宏さん（右）



写真2 野菜苗生産

1 経営の中心となる

起代子さんは、靖宏氏と結婚されてから農業に携わるようになり、40年が経過しました。結婚当初は施設野菜専作経営を行っていましたが、農地基盤整備事業による集団転作が推進されるようになると水田作との複合経営とし、昭和60年には水田作専作となりました。

以降、服部農園は順調に地域の信頼を得ながら規模拡大を進めてきました。

しかし、平成7年に靖宏氏が突如、田植えが始まる2週間前に、病気で倒れてしまいました。入院先で「植えれば何とかなる。」という靖宏氏の言葉を聞き、起代子さんは若い従業員と共に、無我夢中で作業を行いました。ところが、いざやってみると「自分は何も知らなかった。」と痛感したそうです。それからは、知らないことを聞くことは恥ずかしいことではないと思い、普及員や農協担当者にどんな些細なことでも聞くようにし、二度と同じ失敗を繰り返さないようにして、苦難を乗り越えてきました。



写真3 大麦生産

2 息子のお陰でここまで来た

「今の服部農園があるのは息子のお陰」、
「経営が大変なときに、息子は何も言わず付いてきてくれた。」と忠さんへの感謝を口にする起代子さん。靖宏氏が倒れた1年後に、忠さんは服部農園に加わりました。靖宏氏のアドバイスを受けながら、不慣れな農作業を2人して取り組んできたそうです。

現在、生産計画は起代子さんと忠さんの2人が立て、最終的に靖宏氏が決定しているそうです。起代子さんの役割は労務管理、作業補助などで、以前は経理までやっていましたが、娘さんも手伝ってくれるようになり、たいへん助かっているとのこと。



写真4 服部夫妻を囲んで
前列 林さん(左)、恵良さん(右)
後列 渡慶次さん(左)、忠さん(中)、高須さん(右)

3 法人設立へ

平成11年に服部農園は有限会社となり、給与制、日曜休日制や1日8時間労働制を導入しました。法人化した理由には、靖宏氏がもともと農家といえども会社組織にしたという夢があったこと、従業員を雇用するには休日の導入が必要だったことからでした。

現在では、始業前の朝のミーティングで仕事の分担を確認し合い、作業終了後は1日の反省を兼ねて全員、日報を書くようにしています。これにより、作業の効率化が図られるとともに、社内の団結力がより強固なものとなっています。

また起代子さんは「人様の財産を借りて、仕事をさせてもらっている。」という思いから、常日頃から従業員には、地域の人に会ったら必ずあいさつするようにと指導しています。

4 将来の夢

「若い人たちのお陰で自分たちが生活できている。」、また「会社は従業員のために、従業員は会社のために」と常に若い人たちのことを考えている起代子さん。将来の夢をお聞きしたところ、「今後、さらに経営面積が増加すると思われるので、若い従業員を増やしたい。そして、将来、息子夫婦が安定した経営ができ、若い人たちが安心して仕事ができるようにしていきたい。」と語っておられました。

執 筆：農業経営課

取材協力：尾張農林水産事務所農業改良普及課